

# 制御理論



2024年4月5日

無線部開発班 JG1VPP

nextzlog.dev

---

---

# 目次

---

---

<b>第 1 章 可制御性</b>	<b>3</b>
1.1 線形システムの分解	3
1.2 可制御性	5
1.3 可観測性	7
1.4 双対性	7
1.5 最小実現	7
<b>第 2 章 最適制御</b>	<b>8</b>
2.1 時間応答と入力大きさ	8
2.2 評価関数による制御性能と入力の評価	9
2.3 評価関数を最小にする最適制御則	9
2.4 折り返し法による最適レギュレータの設計	11

---

---

# 第1章 可制御性

---

---

制御則を構成するには、前提として、状態が観測可能で、極が任意に配置できる必要がある。

## 1.1 線形システムの分解

### 1.1.1 対角正準形

状態方程式が式 (1.1) で与えられる  $n$  次 SISO 系を考える。

$$\begin{aligned}\dot{\mathbf{x}}(t) &= \mathbf{A}\mathbf{x}(t) + \mathbf{b}u(t), \\ y(t) &= \mathbf{c}\mathbf{x}(t).\end{aligned}\tag{1.1}$$

行列  $A$  で、固有値  $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  は、相異なる値と仮定する。固有ベクトルを  $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n$  とし、行列  $T$  を式 (1.2) とする。

$$T = [\mathbf{v}_1 \quad \cdots \quad \mathbf{v}_n].\tag{1.2}$$

固有値が相異なるので、 $T$  は正則で、逆行列が存在する。この行列  $T$  を使用して、式 (1.3) に与える変数変換を行う。

$$\mathbf{x}(t) = T\mathbf{z}(t).\tag{1.3}$$

ここで、式 (1.1) より、

$$\begin{aligned}\dot{\mathbf{z}}(t) &= T^{-1}AT\mathbf{z}(t) + T^{-1}\mathbf{b}u(t), \\ y(t) &= \mathbf{c}T\mathbf{z}(t).\end{aligned}\tag{1.4}$$

これは行列  $A$  を対角化する操作に当たり、

$$\hat{A} = T^{-1}AT = \begin{bmatrix} \lambda_1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \lambda_2 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & \lambda_n \end{bmatrix}.\tag{1.5}$$

また、

$$\hat{\mathbf{b}} = T^{-1}\mathbf{b} = \begin{bmatrix} \hat{b}_1 \\ \vdots \\ \hat{b}_n \end{bmatrix}, \quad \hat{\mathbf{c}} = \mathbf{c}T = [\hat{c}_1 \quad \cdots \quad \hat{c}_n].\tag{1.6}$$

Fig. 1.1 に示す通り、 $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  に対応する系に分解できる。

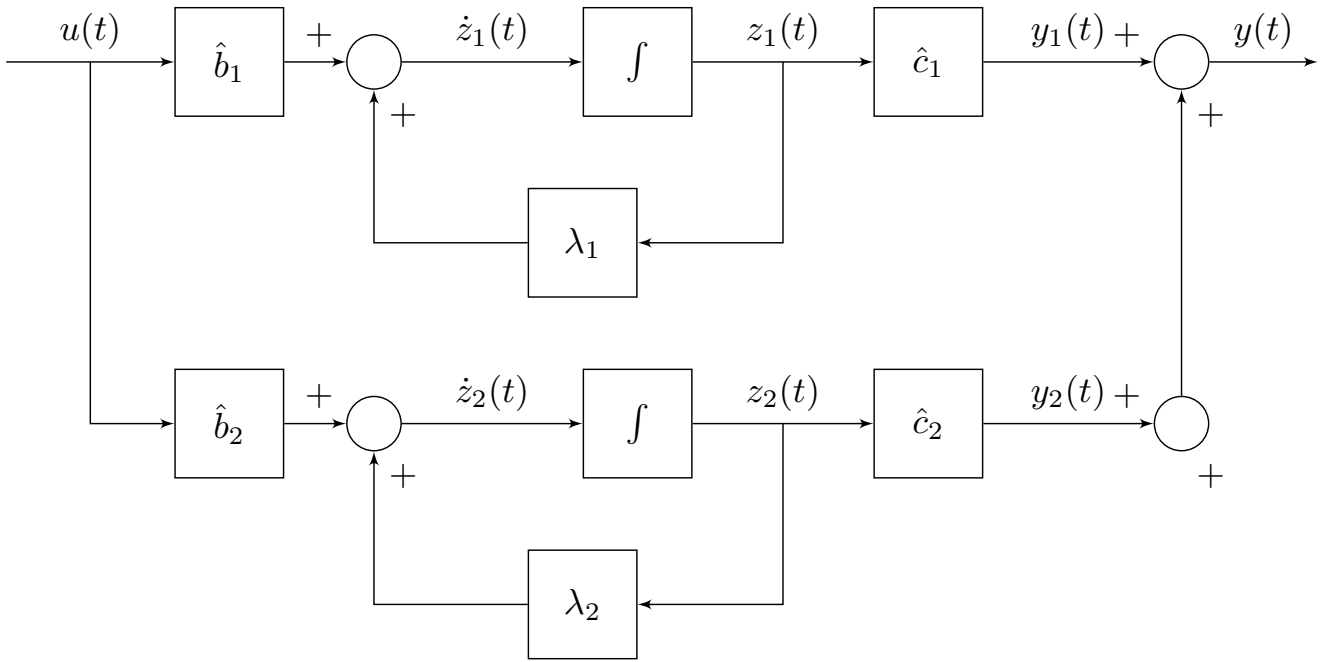


Fig. 1.1: linear subsystems.

状態  $z_i(t)$  は、 $\hat{b}_i \neq 0$  ならば可制御で、 $u(t)$  で制御できる。状態  $z_i(t)$  は、 $\hat{c}_i \neq 0$  ならば可観測で、 $y(t)$  で推定できる。

### 1.1.2 伝達関数との関係

式 (1.1) で、 $\mathbf{x}(0) = \mathbf{0}$  と仮定し、 $A, \mathbf{b}, \mathbf{c}$  を式 (1.7) で与える。

$$A = \begin{bmatrix} 2 & -2 & 3 \\ 1 & 1 & 1 \\ 1 & 3 & -1 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{b} = \begin{bmatrix} 5 \\ 3 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{c} = [1 \quad 0 \quad -1]. \quad (1.7)$$

伝達関数を求めると、

$$G(s) = \mathbf{c}(sI - A)^{-1}\mathbf{b} = \frac{\text{cadj}(sI - A)\mathbf{b}}{|sI - A|}. \quad (1.8)$$

$\mathbf{b}, \mathbf{c}$  を代入して、余因子行列に関する公式を使用すると、

$$G(s) = \frac{5(s-1)(s-3)}{(s+2)(s-1)(s-3)} = \frac{5}{s+2}. \quad (1.9)$$

極零相殺で1次の伝達関数となり、3次よりも低くなる。行列  $A$  の固有値は  $-2, 1, 3$  で、対応する固有ベクトルは、

$$\mathbf{v}_1 = \begin{bmatrix} -11 \\ -1 \\ 14 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{v}_2 = \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{v}_3 = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{bmatrix}. \quad (1.10)$$

式 (1.2) の行列  $T$  を構成すると、

$$T = [\mathbf{v}_1 \quad \mathbf{v}_2 \quad \mathbf{v}_3] = \begin{bmatrix} -11 & -1 & 1 \\ -1 & 1 & 1 \\ 14 & 1 & 1 \end{bmatrix}. \quad (1.11)$$

従って、

$$\hat{\mathbf{b}} = T^{-1}\mathbf{b} = \begin{bmatrix} -\frac{1}{5} \\ 0 \\ \frac{14}{5} \end{bmatrix}, \quad \hat{\mathbf{c}} = \mathbf{c}T = [-25 \quad -2 \quad 0]. \quad (1.12)$$

以上を第??節の議論に当てはめると、

- $\lambda_1$  の系は可制御で可観測
- $\lambda_2$  の系は不可制御で可観測
- $\lambda_3$  の系は可制御で不可観測

伝達関数には、可制御かつ可観測の部分系のみ出現する。式 (1.8) では、 $s = -2$  の極のみ伝達関数  $G(s)$  に出現した。

## 1.2 可制御性

極配置法の必要十分条件は、系  $\{A, \mathbf{b}\}$  の可制御性である。式 (1.1) で、任意の状態  $\mathbf{x}_f$  と、全ての初期値  $\mathbf{x}(0)$  に対し、有限な時刻  $t_f$  で  $\mathbf{x}(t_f) = \mathbf{x}_f$  とできれば、可制御である。

### 1.2.1 可制御グラム行列

$n$  次系で、式 (1.13) に定義する可制御グラム行列を考える。

$$W_c = \int_0^{t_f} e^{-A\tau} \mathbf{b}^t \mathbf{b} e^{-tA\tau} d\tau. \quad (1.13)$$

可制御性の必要十分条件は、行列  $W_c$  の正定値性である。行列  $W_c$  は、式 (1.14) に示すリアプノフ方程式の解である。

$${}^t A W_c + W_c A + \mathbf{b}^t \mathbf{b} = O \Big|_{t_f \rightarrow \infty}. \quad (1.14)$$

積の微分方程式から容易に導ける。

$$\int_0^\infty \frac{d}{dt} \left\{ e^{tA} \mathbf{b}^t \mathbf{b} e^{At} \right\} dt = -\mathbf{b}^t \mathbf{b}. \quad (1.15)$$

ただし、前提として漸近安定の場合に限る。

$$\lim_{t \rightarrow \infty} e^{At} = 0. \quad (1.16)$$

逆に、正定値行列  $W_c$  が存在する場合、漸近安定である。また、 $W_c$  の固有値は、その状態の制御の容易さを表す。

### 十分性の証明

正定値行列  $W_c$  を仮定すると、逆行列  $W_c^{-1}$  が存在する。適当な時刻  $t_f \geq t$  を選び、操作  $u(t)$  を式 (1.17) で与える。

$$u(t) = {}^t \mathbf{b} e^{-tA} W_c^{-1} (-\mathbf{x}(0) + e^{-At_f} \mathbf{x}_f). \quad (1.17)$$

式 (2.7) より、可制御性が導かれる。

$$\mathbf{x}(t_f) = e^{At_f} (\mathbf{x}(0) - \mathbf{x}(0) + e^{-At_f} \mathbf{x}_f) = \mathbf{x}_f. \quad (1.18)$$

### 必要性の証明

非正定値行列  $W_c$  に対し、式 (1.19) を満たす  $\mathbf{x}_f$  を考える。

$$\begin{aligned} {}^t \mathbf{x}_f W_c \mathbf{x}_f &= \int_0^{t_f} \| {}^t \mathbf{b} e^{-tA\tau} \mathbf{x}_f \|^2 d\tau = 0, \\ \mathbf{x}_f &\neq \mathbf{0}. \end{aligned} \quad (1.19)$$

連続関数なので、任意の  $t_f$  に対し、式 (1.20) が成立する。

$${}^t \mathbf{b} e^{-tA\tau} \mathbf{x}_f = {}^t \mathbf{x}_f e^{-A\tau} \mathbf{b} = 0. \quad (1.20)$$

式 (1.1) の解は、式 (2.7) となる。ここで可制御と仮定する。

$$\mathbf{x}(t) = e^{At} \left( \mathbf{x}(0) + \int_0^t e^{-A\tau} \mathbf{b}u(\tau) d\tau \right). \quad (1.21)$$

初期値  $\mathbf{x}_f$  から原点  $\mathbf{0}$  に遷移させる操作  $u(t)$  が存在して、

$$\mathbf{x}_f = - \int_0^{t_f} e^{-A\tau} \mathbf{b}u(\tau) d\tau. \quad (1.22)$$

従って、

$${}^t\mathbf{x}_f \mathbf{x}_f = - \int_0^{t_f} {}^t\mathbf{x}_f e^{-A\tau} \mathbf{b}u(\tau) d\tau = 0. \quad (1.23)$$

式 (1.19) と矛盾するので、可制御なら  $W_c$  は正定値である。

## 1.2.2 可制御行列

式 (1.24) の可制御行列  $U_c$  の正則性も、可制御性を与える。

$$U_c = \begin{bmatrix} \mathbf{b} & A\mathbf{b} & A^2\mathbf{b} & \cdots & A^{n-1}\mathbf{b} \end{bmatrix}. \quad (1.24)$$

1 入力なら  $U_c$  は正方行列なので、 $|U_c| \neq 0$  と等価である。

### 十分性の証明

不可制御と仮定すると、式 (1.25) を満たす  $\mathbf{x}_f$  が存在する。

$$\begin{aligned} {}^t\mathbf{x}_f W_c \mathbf{x}_f &= \int_0^{t_f} \| {}^t\mathbf{b}e^{-tA\tau} \mathbf{x}_f \|^2 d\tau = 0, \\ \mathbf{x}_f &\neq \mathbf{0}. \end{aligned} \quad (1.25)$$

ここから、

$${}^t\mathbf{b}e^{-tA} \mathbf{x}_f = 0. \quad (1.26)$$

$t$  で微分して  $t=0$  とすると、

$$\begin{bmatrix} {}^t\mathbf{b} \\ {}^t\mathbf{b}^t A \\ {}^t\mathbf{b}({}^t A)^2 \\ \vdots \\ {}^t\mathbf{b}({}^t A)^{n-1} \end{bmatrix} \mathbf{x}_f = {}^t U_c \mathbf{x}_f = \mathbf{0}. \quad (1.27)$$

式 (1.27) から、行列  $U_c$  は非正則で、十分性が証明された。

### 必要性の証明

行列  $A$  の特性方程式は、適当な実数  $\lambda$  に対し、

$$|\lambda I - A| = \lambda^n + a_{n-1}\lambda^{n-1} + \cdots + a_1\lambda + a_0. \quad (1.28)$$

$\lambda$  を  $A$  に置換すると、ケーリー・ハミルトンの定理より、

$$A^n + a_{n-1}A^{n-1} + \cdots + a_1A + a_0I = O. \quad (1.29)$$

$e^{At}$  を、適当な関数  $q_0(t), \dots, q_{n-1}(t)$  で級数展開すると、

$$e^{At} = q_0(t)I + q_1(t)A + \cdots + q_{n-1}(t)A^{n-1}. \quad (1.30)$$

次数  $n$  を下げられた。式 (2.7) より、

$$e^{-At}\mathbf{x}(t) - \mathbf{x}(0) = \sum_{i=0}^{n-1} q_i(-\tau)A^i\mathbf{b} \int_0^t u(\tau)d\tau. \quad (1.31)$$

式 (1.31) が成立する必要条件は、式 (1.24) の正則性である。

## 1.3 可観測性

可観測なら、有限な時間  $t_f$  で初期値  $\mathbf{x}(0)$  を推定できる。任意の速度で漸近的に収束する状態推定器を構成できる。

### 1.3.1 可観測グラム行列

$n$  次系で、式 (1.32) に定義する**可観測グラム行列**を考える。可観測性の必要十分条件は、行列  $W_o$  の正定値性である。

$$W_o = \int_0^{t_f} e^{tA\tau} \mathbf{c} \mathbf{c}^T e^{A\tau} d\tau. \quad (1.32)$$

行列  $W_o$  は、式 (1.33) に示すリアプノフ方程式の解である。

$${}^tAW_o + W_oA + {}^t\mathbf{c}\mathbf{c}. \quad (1.33)$$

また、 $W_o$  の固有値は、その状態の観測の容易さを表す。

### 1.3.2 可観測行列

式 (1.34) の可観測行列  $U_o$  の正則性も、可観測性を与える。

$$U_o = \begin{bmatrix} \mathbf{c} \\ \mathbf{c}A \\ \mathbf{c}A^2 \\ \vdots \\ \mathbf{c}A^{n-1} \end{bmatrix}. \quad (1.34)$$

## 1.4 双対性

- 系  $\{A, \mathbf{b}\}$  が可制御なら、双対系  $\{{}^t\mathbf{b}, {}^tA\}$  は可観測
- 系  $\{\mathbf{c}, A\}$  が可観測なら、双対系  $\{{}^tA, {}^t\mathbf{c}\}$  は可制御

## 1.5 最小実現

可制御で可観測な状態空間を得ることを**最小実現**と呼ぶ。余分な状態変数を持つ系は、不可制御や不可観測となる。

## 第2章 最適制御

極配置法では、目標追従速度や応答の概形を設計できた。最適制御では、2次形式のエネルギー関数を最小化する。

### 2.1 時間応答と入力の大きさ

式 (2.1) に示す外乱のないバネ・マス・ダンパ系を考える。

$$M\ddot{y}(t) + D\dot{y}(t) + Ky(t) = u(t). \quad (2.1)$$

状態変数を式 (2.2) で定義する。

$$\mathbf{x}(t) = \begin{bmatrix} x_1(t) \\ x_2(t) \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} y(t) \\ \dot{y}(t) \end{bmatrix}. \quad (2.2)$$

$M = 1, D = 5, K = 6$  とすると、状態空間表現は、

$$\dot{\mathbf{x}}(t) = A\mathbf{x}(t) + \mathbf{b}u(t) = \begin{bmatrix} 0 & 1 \\ -6 & -5 \end{bmatrix} \mathbf{x}(t) + \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \end{bmatrix} u(t). \quad (2.3)$$

3重の極  $-3$  を持つ状態フィードバック制御を設計する。

$$\dot{\mathbf{x}}(t) = (A - \mathbf{b}\mathbf{f})\mathbf{x}(t) = A_f\mathbf{x}(t). \quad (2.4)$$

$A_f$  の固有値を  $-3$  の重根に配置すると、帰還倍率  $\mathbf{f}$  は、

$$\mathbf{f} = \begin{bmatrix} 3 & 1 \end{bmatrix}. \quad (2.5)$$

ここで、6章の議論を復習しよう。

$$sX(s) - \mathbf{x}(0) = A_f X(s), \text{ where } X(s) = \mathcal{L}[\mathbf{x}(t)]. \quad (2.6)$$

従って、式 (2.4) の時間発展の解は、式 (2.7) で与えられる。

$$\mathbf{x}(t) = \mathcal{L}^{-1} [(sI - A_f)^{-1}] \mathbf{x}(0) = e^{A_f t} \mathbf{x}(0). \quad (2.7)$$

式 (2.7) の逆行列を求めると、

$$(sI - A_f)^{-1} = \frac{1}{(s+3)^2} \begin{bmatrix} s+6 & 1 \\ -9 & s \end{bmatrix}. \quad (2.8)$$

式 (2.9) の応答を得る。

$$\mathbf{x}(t) = e^{-3t} \begin{bmatrix} 1+3t & t \\ -9t & 1-3t \end{bmatrix} \mathbf{x}(0). \quad (2.9)$$

次に、固有値を  $-5$  の重根に配置すると、帰還倍率  $\mathbf{f}$  は、

$$\mathbf{f} = \begin{bmatrix} 19 & 5 \end{bmatrix}. \quad (2.10)$$

適当に初期状態  $\mathbf{x}(0)$  を設定し、Fig. 2.1 に示す応答を得る。



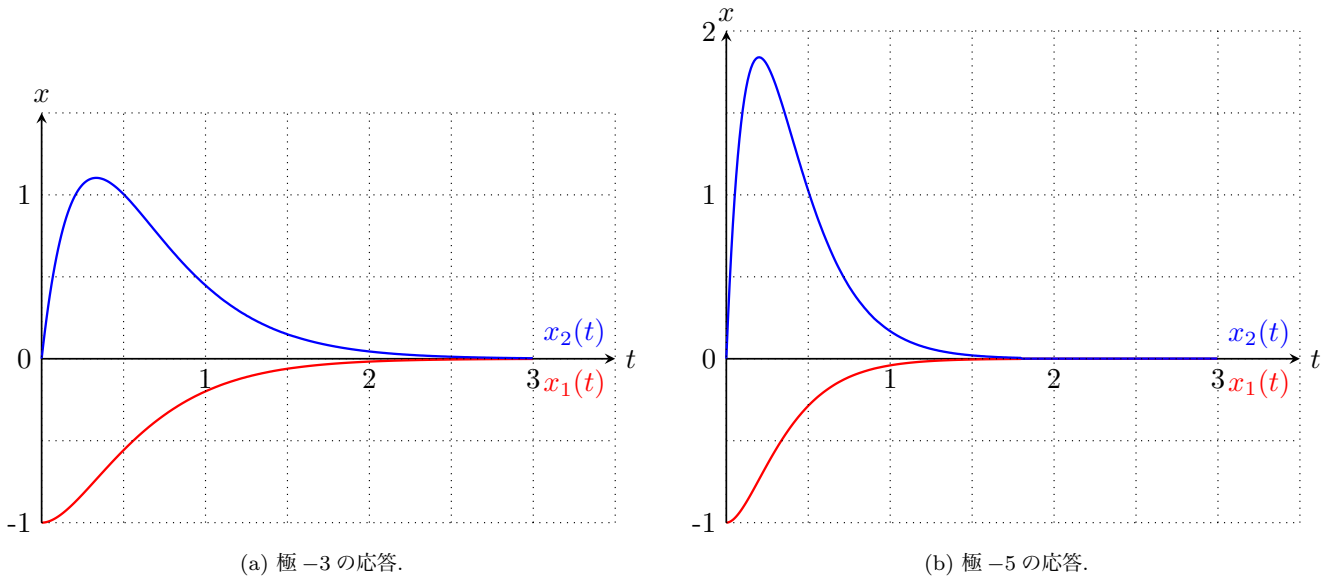


Fig. 2.1: 極配置法の場合の応答.

極を負の領域の左側に配置すれば、追従速度が改善する。しかし、過大な操作で、安定余裕を損なう可能性もある。

## 2.2 評価関数による制御性能と入力の評価

状態  $\mathbf{x}(t)$  と操作  $u(t)$  の 2 乗の積分をエネルギーと呼ぶ。

$$J(\mathbf{x}) = \int_0^{\infty} \mathbf{x}^2(t) dt, \quad J(u) = \int_0^{\infty} u^2(t) dt. \quad (2.11)$$

例えば、第??節で極 -3 の場合のエネルギーは、

$$J(x_1) = \frac{5}{12}, \quad J(x_2) = \frac{3}{4}, \quad J(u) = \frac{3}{2}. \quad (2.12)$$

極 -5 の場合のエネルギーは、

$$J(x_1) = \frac{1}{4}, \quad J(x_2) = \frac{5}{4}, \quad J(u) = \frac{53}{2}. \quad (2.13)$$

追従速度に応じて、エネルギーが変化する様子がわかる。

## 2.3 評価関数を最小にする最適制御則

重み  $Q, r$  を乗じた式 (2.14) の評価関数を指標に設計する。

$$J = \int_0^{\infty} \{ \mathbf{x}(t) Q \mathbf{x}(t) + r u^2(t) \} dt. \quad (2.14)$$

制約付き最適化なので、 $Q, r$  には、トレードオフがある。

$$Q = \begin{bmatrix} q_1 & \cdots & 0 \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & \cdots & q_n \end{bmatrix}. \quad (2.15)$$

式 (2.14) を最小化する最適制御則は式 (2.16) で与えられる。

$$u(t) = -r^{-1} \mathbf{b}^T \mathbf{P} \mathbf{x}(t). \quad (2.16)$$

正定値行列  $P$  は、式 (2.17) のリッカチ方程式の解である。

$${}^tAP + PA - Pbr^{-1}{}^tbP + Q = O. \quad (2.17)$$

証明は、辻峰男の現代制御理論ノートの付録を参照せよ。

$$\min J = {}^t\mathbf{x}(0)P\mathbf{x}(0). \quad (2.18)$$

式 (2.16) の制御則は、必ず安定で、最適安定化制御と呼ぶ。閉ループ系の一巡伝達関数  $L$  は、式 (2.19) で与えられる。

$$L(s) = r^{-1}{}^tbP(sI - A)^{-1}\mathbf{b}. \quad (2.19)$$

ベクトル軌跡は  $-1$  を中心とした単位円の右を通過する。

$$\|1 + L(j\omega)\|^2 \geq 1, \quad \lim_{s \rightarrow \infty} L(s) = 0. \quad (2.20)$$

従って、無限の利得余裕と  $60^\circ$  以上の位相余裕を備える。式 (2.3) の系で、重み  $Q, r$  と行列  $P$  を式 (2.21) で与えよう。

$$Q = \begin{bmatrix} 13 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix}, \quad r = 1, \quad P = \begin{bmatrix} p_1 & p_2 \\ p_2 & p_3 \end{bmatrix}. \quad (2.21)$$

式 (2.17) に代入すると、

$$\begin{aligned} -p_2^2 - 12p_2 + 13 &= 0, \\ p_1 - 5p_2 - 6p_3 - p_2p_3 &= 0, \\ -p_3^2 + 2p_2 - 10p_3 + 1 &= 0. \end{aligned} \quad (2.22)$$

$P$  が正定行列である点に注意して解くと、

$$P = \begin{bmatrix} -30 + 14\sqrt{7} & 1 \\ 1 & -5 + 2\sqrt{7} \end{bmatrix}. \quad (2.23)$$

式 (2.24) の制御則を得る。

$$u(t) = - \begin{bmatrix} 1 & -5 + 2\sqrt{7} \end{bmatrix} \mathbf{x}(t). \quad (2.24)$$

式 (2.25) の応答を得る。

$$\mathbf{x}(t) = e^{-\sqrt{7}t} \begin{bmatrix} 1 + \sqrt{7}t & t \\ -7t & 1 - \sqrt{7}t \end{bmatrix} \mathbf{x}(0). \quad (2.25)$$

同じ手順で、式 (2.26) の重み  $Q, r$  で制御則を設計しよう。

$$Q = \begin{bmatrix} 13 & 0 \\ 0 & 9 \end{bmatrix}, \quad r = 1. \quad (2.26)$$

正定値行列  $P$  を求めると、

$$P = \begin{bmatrix} 12 & 1 \\ 1 & 1 \end{bmatrix}. \quad (2.27)$$

Fig. 2.1 と同じ初期状態  $\mathbf{x}(0)$  に対する応答を、Fig. 2.2 に示す。

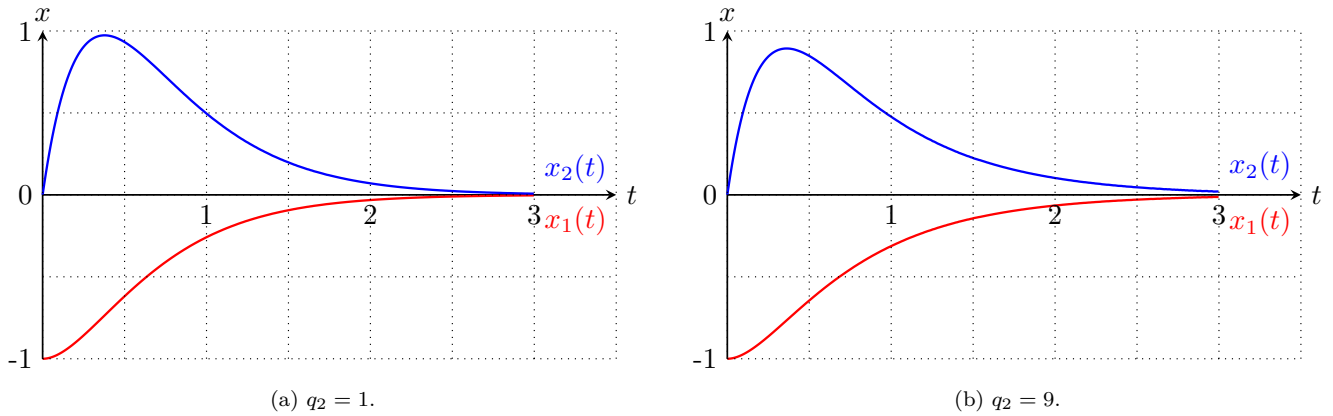


Fig. 2.2: 最適制御の場合の応答.

$q_2$  の調整により  $x_2(t)$  の最大値が減少する様子が見える。

## 2.4 折り返し法による最適レギュレータの設計

折り返し法は、最適制御則の主要極を指定の領域に移す。Fig. 2.3 に示す通り、直線  $-k$  の右側の極は、左に反転する。

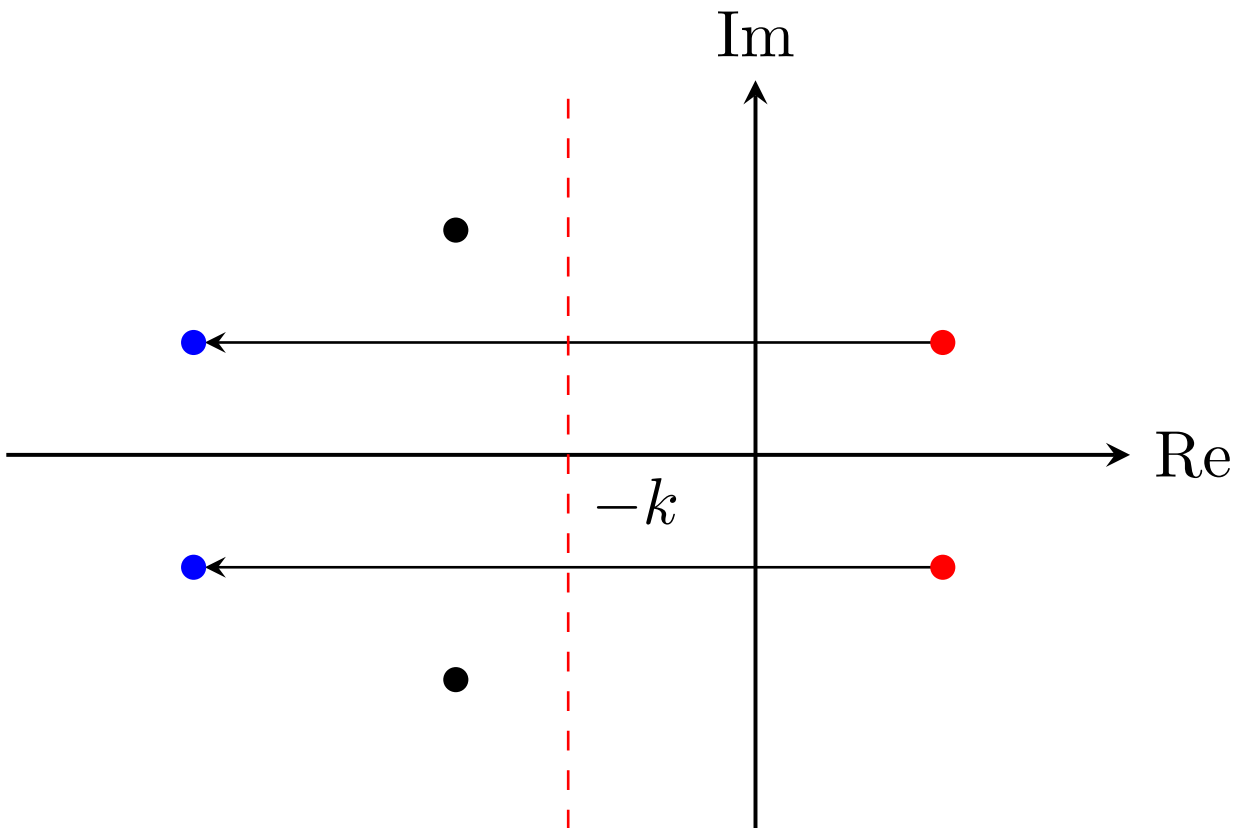


Fig. 2.3: 折り返し法による極の反転.

詳細は川崎・示村 (1979) を参照せよ。簡単に導出する。式 (2.17) で、 $A$  の固有値の 2 乗の集合を  $\lambda^2(A)$  とすると、

$$\lambda^2(A) = \lambda^2(A - \mathbf{b}r^{-1}\mathbf{t}\mathbf{b}P). \quad (2.28)$$

実部が負の固有値を  $\lambda_i^-$  で、正の固有値を  $\lambda_j^+$  で表すと、

$$\lambda(A - \mathbf{b}r^{-1}\mathbf{t}\mathbf{b}P) = \{\dots, \lambda_i^-(A), \dots, -\lambda_j^+(A), \dots\}. \quad (2.29)$$

式 (2.2) に代わって式 (2.30) の系を考えると、可制御である。

$$\dot{\mathbf{x}}(t) = (A + kI)\mathbf{x}(t) + \mathbf{b}u(t). \quad (2.30)$$

故に、式 (2.31) の最大解となる正定値行列  $\hat{P}$  が存在する。

$${}^t(A + kI)P + P(A + kI) - P\mathbf{b}r^{-1t}\mathbf{b}P = O. \quad (2.31)$$

$\lambda(A + kI) = \lambda(A) + k$  なので、式 (2.29) より、

$$\lambda(A - \mathbf{b}r^{-1t}\mathbf{b}\hat{P}) = \{\dots, \lambda_i^-(A), \dots, -\lambda_j^+(A) - 2k\}. \quad (2.32)$$

制御則を式 (2.33) で与える。

$$u(t) = -r^{-1t}\mathbf{b}\hat{P}\mathbf{x}(t). \quad (2.33)$$

この制御則は、式 (2.34) の重み  $Q$  で式 (2.14) を最小化する。

$$Q = 2k\hat{P}. \quad (2.34)$$

全ての極が  $-k$  の左に配置され、 $e^{-kt}$  より速く減衰する。